



東京外国語大学教授・副学長

# 林 佳世子氏 (高校29期)

お茶の水女子大卒。東京大学人文科学研究科博士課程中退。東京大学東洋文化研究所助手をへて、東京外国語大学に勤務。現在は、東京外国語大学教授・副学長。主な著書は、『オスマン帝国の時代』（山川出版社）、『オスマン帝国 500年の平和』（講談社）、*The Ottoman State and Societies in Change: A Study of the 19th Century Temettuat Registers* (Kegan Paul: London, 共編著)など。

立川高校を卒業したのは、昭和52年(1977年)のことなので、ああ、もう大昔ですね。でも、幾度かのブランクはありましたが、50代となった今も、立高時代のクラスメートは現在進行形で付き合っている、かけがえのない仲間です。

ブランクの1つは、20代後半から30代前半にかけて、数年間にわたるトルコ留学でした。立川高校時代に世界史の面白さに惹かれたのがきっかけで、大学では史学科に進み、イスラム史の研究を志しました。オスマン帝国の歴史を研究対象にした結果、博士課程在学時に最初に留学したのはイスタンブール大学でした。その後もオスマン・トルコ語の古文書史料を読むため、イスタンブールでの長期滞在を繰り返しました。この間は立高仲間からは行方不明扱いでしたが、やがて帰国。幸い、大学で職をえ、研究教育を職業とすることになりました。そのことと、「イスタンブール」という不思議で奥深い、魅力的な町を第二の故郷とすることができたことは、本当に幸せなことだったと思います。

私たちのやっている歴史研究の仕事は、史料を解読しては論文をかくという、じみ～なものですが、皆が持っている「野心」は、小さな小さな事実を積み重ね、そこから大きな歴史の流れの証拠をつかむ！というものです。私も、イスタンブールにある宗教寄進財の帳簿や、建物碑文の解読といった作業を通じ、17世紀や18世紀にオスマン帝国に生きた人々を取り巻いていた社会の仕組みを知りたいと願っています。

野心の実現にはまだまだですが、それでも史料を読めば、いつかは「流れ」に結実するであろう、小さな発見に満ちています。そして、こうした世界へのきっかけを作ってくださったのは、立高時代の世界史の小暮先生でした。お得意のマンガ入りのプリントで、歴史の流れを鮮やかに説明してくださいました。ただ、生意気だった私は、別バージョンのチャートを「発案」して、密かに先生と張り合っていたのを懐かしく思い出します。

前述のように、歴史を勉強する醍醐味は、証拠(史料)をもとに因果関係のストーリーをみいだしていくことにあります。ただし、ストーリーの立て方は一つではなく、見方を変えると違うストーリーも生まれます。いま思えば、私は、生意気にも小暮先生に張り合っていた高校時代に、期せずしてその醍醐味を味わわせてもらっていたのかもしれませんが、それを考えると、改めて立高に感謝！です。

